# “支え合いマップ” ＆ “ご近所福祉”研究集会

2009 年 1 月 31 日（土）～2 月 1 日（日）
アイプラザ岡崎　講堂
主催　全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）
協力　住民流福祉総合研究所

## Y. K. さん

### 「ご近所福祉から小規模福祉を作り出すために」
（コーディネーター　木原孝久氏）

2 日目の締めは各地域で活躍していらっしゃる大物世話焼きさんと、それを後方支援する社協福祉協議会のバックアップさんたち 10 名によるシンポジュームでした。忘れてしまわない内に聞いたことをメモしておきたいと思います。

**個別対応の問題解決が地域福祉でやれているか？**
社会保険の介護の方は事業所がしっかりやっているのに、地域福祉のほうは社協もボランティアも難問を避けている場合が多い。ふれあいイベントはやるが、安心して暮らせる町づくり、生活を支える福祉委員会になっていない。町内会長も民生委員も当番制でほんとうの世話焼きさんが選ばれていないのだから、近所のニーズを見ようとしないし上がってもこない、従って問題解決はできない。

**豊中市の社協　勝部麗子さんの場合。「なんでも相談窓口」を作った。**
マンションの4Fから降りられない老人がいる。
何とかしようと逃げないでかかわる。
負ぶい紐を思いついて負ぶって降ろした。（解決のための工夫）

**ゴミ屋敷の苦情**
排除するのではなく支援する方向で解決ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄをつくる。町内会が苦情者との間の盾になる。「人生を見失いかけていました。」頑なな老人の心がほぐれた。成功！
1つの成功体験が更なる難問にチャレンジさせる。これは愛である。

**個別の問題を一般化する。**
社協、福祉委員会、ボランティア会が連携した「チーム社協」を組織して解決にあたる。社協は行政へのパイプ役となる。地域活動をバックアップする。行政へ繋いでくれる頼れる社協。地域にも行政の中にもいっしょに働いてくれる人がいるので、その人を探す。
（前線部隊の世話焼きさんを発掘する）

財政再生を掲げる橋本知事にも現場を見てもらう。住民の声に知事たじたじ。

**「なんでも相談窓口」**
継続的に活動出来るように後方支援をする。
各小学校区に福祉推進委員

**川崎市のボランティア介護グループ「すずの会」代表　鈴木恵子さんの場合。**
バリアフリーの旅
普通の主婦が普通の人間としてその人を大切に見ている。介護度やレッテルで人を見ない。人間関係を築く。年2回の旅行に連れ出す。いろんな工夫を積み重ねて解決していくと、行政からも期待されるようになる。認知される。

**在宅医療**
新規開業の医院をすかさず一番に訪ねる。信頼関係を築いて在宅医療のサポーターになってもらう。動けない老人宅へ往診をしてもらう。

**介護施設と繋がる**
施設の中に喫茶店を出して利用者さんやその家族と繋がる。施設情報誌「タッチ」を発行することでオンブズマンみたいではあるが施設の内実を詳しく知る。訪問を重ねて信頼関係を築く。行政も「すずの会」に期待してくれるようになる。かかわりを持って繋いでいくことの大切さ。

**ダイヤモンドクラブ**
日常生活がどうなっているかと気になる人を丁寧に探す。自宅を開放した地域限定の人間の集まりの中から、くらしの安心が生まれる。ここでの愚痴をほっとかない。
認知症の人のゴミ屋敷問題で集まったダイヤモンドクラブもある。ほっとけない。
人間関係があればプライドも守りつつお世話が出来る。うち（町内）の子供たちが・・・
うちのお年寄りが・・・（仲間意識）

**野川サブン　（組織と平の市民の関係性について）**
「私の町の健やか活動」再結成に際して、「すずの会」も手を上げた。既存の7団体（すずの会、地区社協、民生委員、地域包括支援センター、医師会、特養、行政）と横並びで連携し、互いに後方支援をしながら自由に活動できる組織にする。
しかし、最初は、「すずの会は勝手なグループが勝手なことをしているだけ」と、地域の猛反対にあった。ところが今まで手つかずの個別支援をしていたのに対し、「よかった！こういうのが出来るのを待っていた！」という住民の声が追い風になった。
野川セブンは認知された。

**安城市社協の吉村了子さん**
ご近所のニーズを発掘（長い坂道の途中にひと休み用ベンチが欲しい）

町内会から地区社協委員会へ、近所の人と現場視察をする—町内会に持ち帰って
要望書を作成—行政に出してめでたくニーズ解決。社協は後方支援の役目をする。

民間の場合、私たちが必要と思ったらやる。前線部隊はおばちゃんたち。
地域が見えているかどうかが勝負で地域が見えない会長職は務まらない。
自閉症、認知症へも個別に配慮。通学路に趣旨を伝えて協力を仰ぐ。
個別に近所が支えるべき活動。主体は世話焼きさん。社協は後方支援をする。また
最後は社協が責任を取る。

**最後に一人一言**

・ 活動している人を支えることも大事だが、天性の資質のある人が求められる。
・ 当事者自らの発信SOSも大事。
・ ボランティアセンターで繋がっている。そこを中心にかためていく。
・ あなたならどうする？　考えるプロセスが究極の目標かな？福祉の街づくりは
みんなで考える。
・ 魔法の杖はない。解決の道を教えてくれるのは痛みを感じている当人。活動の中に
その痛みを使っていく。
・ ヘルパーが停まっている家にニーズあり。ニーズに跳びつく。食いつく。

**感想**

それぞれ、生の現場の声が聞けたのは良かった。迫力のある意見や活動に圧倒され
すごいと思った。到底、真似できないなとも思った。精力的に継続的に活動し続けられる
原動力は「愛」であり、放っとけないからやるという「隣人愛」とみた。

## N. K. さん

**1　はじめに**

　今回の主催は CLC であり、また参加者の多くも社協であった。そのため
行政としてどのように取り組むか、という視点が見えづらいところもあった。
木原氏の考えることがすべてではなく、豊田市の、具体的には〇〇自治区に
合う方法を探すことがいちばんであると思う。だからマップをつくること、が
すべてではないが、「この地域に福祉課題はない」のではなく、「マップを
きっかけに考えてもよい」という環境づくりが必要とされているのではないか
という視点は重要であると気付かされた。

**2　すずの会と他の事例の違い**

たんなる住民組織であるが、住民組織のエキスパートであると自認している点で、他の事例とは異なる。本来は行政が、社協が、包括がやるべき、といった意識の垣根を越え、問題があるなら自分たちが何とかする、という強い気持ちがすずの会の活動をさらに向上させているように感じる。会社のような組織ではないが、組織をつくらず組織らしく動くということが「住民らしさ」を活かした活動であり、この会を成功させたポイントである。

一見問題はない地域とみえても、男性介護者、ひとり暮らし、要援護者、と実は様々な状況があり、「助けて」と当事者が声を上げた事例にとどまらず、「SOS」を察知し行動に移すというところが行政や他の機関ではできない、プロ住民の腕の見せ所であると思う。

高齢者と他の機関へのつなぎを熟知しているのも、特殊なようであるが、実際に地域には看護師経験者やヘルパー有資格者等、地域の宝となる人はたくさんいるはず。あとは、そうした人たちをつなげ、活動につなげていけるかどうかである。地域活動は難しいということは承知しているが、地域活動ができるかできないかは、「こんな地域活動は大変！」と思うか、「こんな隣人がいたら安心！」と思うかの違いであると感じた。すずの会の「将来こんな地域に住めれば安心」という思いに感動した。

**3　行政としてできることとは**

今後は、地域福祉に取り組むこと、地域福祉に取り組む団体を支援すること、地域福祉に取り組む団体を育成すること、地域福祉のプロ人材を育成すること等が求められるだろう。

大不況という転換期を迎え、ようやく自分さえよければという感覚から、皆で助け合わなければという感覚になってきている状態になってきている。これをチャンスと捉え、行政として何らかの新たな仕組みをつくる必要はもはやないだろうが、住民にとって有益な情報や支援策をつくり、送り続けることが行政としてできることではないかと感じた。

## J. K. さん

今回、私が参加しようと思ったのは木原孝久氏が講師として来られるからでした。
20数年前、自宅を開放して子育て真っ最中の母親たちと「グループこの指とまれ」を発足したヒントのひとつが、木原氏の「家をひらく」で、「我が家は福祉資源」という考え方でした。

事例として「小さなちいさな児童館」「子ども預け合い」のグループ、
「児童文庫」などがあげられていました。
子育て中のにヒントを頂き、自宅を開放し、近所の方や豊田のいろいろな
ところから子育て中のお母さんたちが集まりました。その後は、私の子ど
もの成長や活動の内容と共に、今の長屋を借りて「フリースペースK」と
して、ご近所福祉というよりも、豊田一円から人が集まるテーマ型のNPO
として動いています。

今はご近所とは程良い距離をとってという感じです。これは自宅開放
から学んだことです。

それで今回の「ご近所福祉」という言葉にはいささか抵抗を覚えました。
でも、かつて経験したことのない超高齢化社会、の到来、介護保険も限界がありますし、
先日、村田さんも話されていましたように「介護保険は介護労働をプロがする。
できないところは自助努力や環境を考える必要がある、プロの住人になる（
地域課題を探し、解決の為歩きまわる人）こと、それには学びが必要であり、
そこで迷いがとれ地域に還元すべく実践する・・・という話に頷ける部分もありました。

今回の木原氏の提唱すること、この言葉も抵抗がありますが「世話焼きさん」の発掘と
「見える化」をはかる「支え合いマップ」の作成も、財源が乏しくなるので、在宅を
勧めるにはこうした方法をとらせるのかと思いました。
「世話焼きさん」というのは微妙なところですね。気をつけないとスピーカーのような
資質も持っているかと思いますので。

事例発表は成功体験というか、いいところを発表していると思いますので、今度鈴木さんが
豊田に来られた時には、課題や問題点を聞きたいと思いました。

ところで社協職員に聞きましたら、民生委員さんには地図を作るように言っているとのこと
でしたが、如何でしょうか。またマップ作りの難しさも言っていましたが・・・。

## K. T. さん

### 1. はじめに

住民流福祉総合研究所：木原孝久所長が、コーディネータとしてこの研究集会を
仕切ったが、この木原氏の主張を出席者に浸透させることが集会の目標だった、
ように思えた。その主張の正当性を裏付ける証拠・証人として 10 名余の人が登壇した。

## ２. 基調講演　木原孝久氏

### ＜公的制度の隙間＞

公的な介護保険制度は、整備されてきたが、隙間は残った。これを埋めるのが、地域における住民の活動であるはずなのに、なかなか実現されていない。公的制度を作り上げた厚生労働省は、社会福祉協議会などの地域における活動に不満を持っている。「これぞ地域福祉の町と言える町を作ってみやがれ」とある厚生労働省の幹部が怒鳴ったそうである。そうした地域福祉のお寒い現状を改善して行くための方法として、「支え合いマップ作り」を中心に置いた活動を提案するとともに、すでに行っている各地の例を紹介した。

### ３. “ご近所”に着眼

住民がお互いに知り合って助け合うことができる集団の大きさは、“ご近所”のおよそ 50 世帯である。この集団に対しては、“常会”とか“集落”などの言葉も使われる。これより大きい 500 世帯の“町内”とか“学区”では、一人一人の生活が見えてこない。そこで“ご近所”に注目する。“ご近所”の中では、お互いがそこに住む人と知り合えるし、心まで見える。なぜ 50 世帯かについて理屈があるわけではない。様々な地域で、調査したり、活動した結果から、そういうことがわかってきた。

### ４. “ご近所”を活性化するには

どこにでもいる“世話焼き”さんを探し出し、認知し、バックアップして、活動してもらうことが最良の方法である。“世話焼”きは、“世話好き”、とか“大阪のおばさん”とか地域によって、色々な言葉が使われている。

人が困っているのを見ると、見過ごせない、すぐに世話をしたくなる人のことである。この人たちは必ずしも、自分がやっていることを、他人に話すわけではない。表に出てこないことが多い。“世話焼き”さんは、生まれながらにこうした性分を持っている人が多い。こうした人が知り得る範囲がご近所”である。

この“世話焼き”さんと、助けの必要な人、つまり要援護者とを結び付け発展させることがキーとなる。要援護者とは、一人暮らしの高齢者、ゴミ屋敷を作っている人、虐待されている人、している人などである。

### ５. マップ作り

活動をスタートさせる第 1 ステップが“支え合いマップ”作りである。要援護者と“世話焼き”さんを、地図の上に印をして、その間を線で結んでみる。このマップにより、誰がだれとつながっているか、もう支援を受けている人、支援をしている人。孤立している人が一目瞭然に分かる。

この段階で打てる手も多くある。

## ６．活動のレベルアップ

次のステップは、ニーズがもれなく摘出されているか、継続されて摘出されているか。直ちに手が打たれているか、など検証をしてゆく。世話焼きだけでは処理できない難しい問題も見つかる。日ごろから地域の中にいろいろな資質を持っている人がいるはずだから、登録しておく。そういう資質がある人に対応をお願いする。さらに必要なら専門職、専門機関に挙げてゆく。社会福祉協議会、民生・児童委員、地域包括支援センターなどが、そうした役割を負っている。理想の姿としては、そうした機関は自ら動くというよりは、“世話焼き”さんが　活動しやすいような後方支援に回れると良い。世話焼きさんのレベルアップ、動機付けには、後方支援団体の力がいる。資質の一つが敏感さである。日ごろの付き合いの中でポロッと言った一言が、「助けてくれ」というつぶやきであるかもしれない。そうしたことを感じ取る敏感さが要求されるので、磨く必要がある。何事もマンネリに陥るし、気持にも山谷がある。新しい刺激がいる。こうしたバックアップは、関係機関の役割である。

## ７．今回の研究集会の良い点の一つ

各地域で、活躍している、世話焼きさん、バックアップさんが、10 名が登壇して、自分の言葉で、自分のやっていること、自分の思いを語ったので、「ああこう言う人なんだ」とイメージがはっきりした。

## ８．個人情報の守秘について

阪神大震災の時に、誰が被災した人を救出したかという調査結果によれば、８０％以上がご近所の人達だった。消防署などの専門家の救出率は１５％程度と聞く。ご近所の再生が、災害の重大な被害減少の決め手である。

要援護者の情報が共有されていないと、緊急かつ適切な手が打てない。ギリギリ突き詰めれば、個人情報が大切か、命が大切かの問題に行き当たる。災害の後、被災者を助けなかった人に。マスコミが取材にきた。「なぜ助けなかったのか」と質問したのに対して、「あの人は、個人情報を教えてくれていなかったから、手を出さなかった」と答えられるだろうか。助けるためには、情報の共有が欠かせないという、明確な認識で進めれば良い。

## ９．行政からの情報提供

高齢者の名簿が行政か提供されないと、マップ作りができないか。必ずしも情報提供は必要がない。ある場合には、名簿の提供を依頼して、反対されたら、動きが取れなくなる。まず住民主導で動いた方が　良い。

ご近所のおばさん3～5人がおれば、必要な情報は集まる。女が良い、男は駄目である。他人のことに日ごろから関心がないので、情報を持っていない。

**10. アンケート調査**

「困っている人が目の前にいる」その時にどうするか

20%の人は、「求められなくても助ける」。70%の人は、「求められれば助ける」と答えている。この事実は、支援者を育成する施策も大切だが、「助けてほしい」と言える人間関係作り、環境の整備も大切であることを物語っている。

**11. 公的制度と住民活動の背反**

デイサービスは、地域のつながりを壊してしまうことも留意すべきである。デイサービスに行くと、地域での集まりに参加しないので、地域の人との関係が冷たくなる。一度施設に入ると、地域の人は「あの人は仲間から外れた」と付き合いを切ってしまう。国が作った制度が隙間を作ってしまうこともある。そうした制度に皆が行ってしまうと、地域の活動が小さくなってしまう。またそうした施設に行っている人は、「すべてのことをやってくれる、気をまわしてやってくれる」ので、何でも他人に頼む傾向になり、自立が弱くなる。人間は誰でも豊かに生きたいと思っており、その根本は自立であるのに、この気持ちから実体が離れてゆく。

**12. ゆずりはの会の活動との関係**

共働事業として市民講座を計画しており、講師の一人として、すずの会（川崎市）の鈴木恵子さんをお呼びする予定である。今回　鈴木さんも講師の一人であった。

彼女は、女の華の時期である 30 代の 10 年間に、夫の単身赴任、子育て、両方の親 4 人の介護と大変な苦労をした。その経験をバネとして、福祉の世界に入った。あくまでも市民の立場を貫いて活動している。「すぐにやる」姿勢を貫いているなど、迫力を感じた。5 月に豊田市でのお話が楽しみである。

## J. N. さん

1. 印象に残った（勉強になった）内容

**（1）支え合いマップ**

〇地域での支え合いには、「支え合いマップ」作成は必須。
〇私の地域でも、このようなものが出来る風土になるとよいと思う。

**（2）講 演**

1）住民流福祉総合研究所　木原孝久　氏

ご近所福祉の本質を分かり易く説き、地域で支え合う具体的な方法論の説明は、今後、地域で、福祉に関して、何らかの形で貢献しようとする者にとって大変勉強になる内容であった。

（特に印象的だった木原語録）

〇福祉制度は整備したが「隙間」が残った。「ご近所」こそが隙間を埋めるカギの一つ。
（「ご近所」とは、およそ50世帯の集落を言う。）

〇「ご近所」での福祉活動を仕切っているのは、「世話焼き」さんである。
ご近所は、世話焼きの活躍の場。「その資質のある人」で、ご近所福祉が成り立つ。

〇ニーズは来ない。ニーズはご近所にある。
「困ったら来なさい」、「言ってくれれば行きます」では、隙間は見えない。
問題は、ご近所まで来なければ見えない

〇ご近所福祉の後方支援を重層的にやるのがよい。
町内の支援力強化が必要。

〇社協に求められているのはイベント開催力ではなく問題解決能力。
福祉は、困った人を助けてナンボ。
〇民生委員や福祉推進員は、「活動」から「推進」にまわり、世話焼きの未解決の問題を拾うべし。

**2）講演―ずずの会　鈴木恵子　氏**

〇ご近所福祉を、いち早く、自らの力で切り拓き、その範囲を拡大し活動を持続されている行動力には驚きと感銘を受けるばかり。

＊集いの場　ミニデイ「リングリングクラブ」
＊ご近所サークル「ダイヤモンドクラブ」
＊地域ネットワーク「野川セブン」
＊介護者サポート　＊介護情報誌発行　＊公園体操

## ２. その他の感想

### （1）研究集会の目的

介護施設に、総量規制を設け、「H26年度までに要介護度2～5の人口の37%が入居できる施設を造る」。残りの63%の人たちは、「在宅で看ろ」というのが国の方針。
この方針を受けて、厚労省の「これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書（H20年）」は、
＊地域における「新たな支え合い」を求めて一住民と行政の協働による新しい福祉がテーマ。
この方針展開が、今回の全国コミュニティライフサポートセンターの研究集会であり、豊田市の共働事業「高齢者を地域で支えるネットワークづくり」のベースなのだろうう。

### （2）「ご近所福祉」の原点は、

ヒューマニズムにあるのではなく、市民としての自助・互助、自己防衛にあると考えるのが現実的なのだろう。
「在宅で」ということになると、「長岡・こぶし園」のように、小規模多機能型居宅介護事業所のようなものが、当事者の近くにあれば、救われることも多いが、それでも、支えきれない部分が、ご近所福祉の対象なのだろう。
団塊の世代が後期高齢者になるこの10数年の間に、ご近所福祉の文化の定着が必要と思う。

### （3）自分の住む地域は、

「隣は何をする人ぞ」の風土になってしまっているが、
はたして、ご近所福祉が実現できるのか。今は、全く想像もつかない。
支援を必要とする実在の方の「支え合いマップ」を作ってみれば、この地域の「ご近所福祉」の現状が測れるのだろう。

### （4）認知症患者へのサポート

徘徊ルートに、顔写真入りのビラを配り、協力を求める事例が賞賛されていたが、認知症患者を身内に持った経験者としては複雑な思いがした。
確かに、この種の支援は助けにはなるが、認知症患者を身内では支えきれず、何とか施設に入れることを希望すれど極めて難しかったのが実情。その問題の解決こそ、肉親の強い願いであったことを思い出す。

# N. H. さん

遅くなりましたが感想です。『総評』 福祉活動の分野でその原点である家族、地域
<ご近所>のあり方を再構築して、少子高齢化に適合した仕組みづくりは各方面で
取り組みされている。 今回、その実例はいづれも大変苦労して運用されている
にもかかわらず、皆さんは困っている人の世話が楽しいと言っていた姿に感動しました。

**『特に気が付いた事』**

**1、組織化されている**地域包括支援、社協、民生委員、自治区<町内会>が垣根を
とって共働して独居老人、老夫婦世帯、障がい者宅などの調査を現地で現認し、
当事者の希望するサポート体制<世話焼き、世話好き>を決め、それをマップ化して
運用している事が良い。

**2、助ける人から『助けられ上手になろう』の言葉**
個人民主主義の台頭による人・地域・企業も"自分の城は自分で守れ"の意識が
浸透した結果、安易に助けを求めないで自立する事を美徳とした人達は助けられ
上手になかなか慣れないのでは？ 従って、普段からご近所とコミュニケーションを
とり、お互いに考え方、性格を理解し合えるよう心掛ける事が大切となる？

**3、地域<集落>の特徴による違いはないか**
・自治区民になっていないアパート、〇〇荘等には自治区の情報伝達がなく高齢者で
ごみ出しルールが理解されない方も多く、ますます孤立化していくのが心配である。

・農山村で過疎化が進んだ地域<以前訪問した飯田市柿の沢地区など>は農作業の
応受援作業が多く実施され、地域内の殆ど全員の顔が見え、連帯感がある所では
老人クラブ中心の生活圏が出来ている。この様な地域は既にご近所力があり、
介護・福祉分野でも比較的スムーズに展開が出来ると思われる。

**4、安城市城南町内会**
木原氏と社協のリーダーシップで福祉委員会を立ち上げ、町内会長自ら熱心に
地域内の支え合い活動を実践している。多くの自治区は福祉部があっても活動が
イベント中心であり、当事者の希望に合った在宅支援は少ないのでは？
<個人的には実施されている話を聞きますが>これからの地域福祉の参考になる
大変良い事例であった。